

研究分野のキーワード：教育社会学，教育知識，職業教育，学校から仕事への移行，高校中退

研究紹介

高校生みなさんは、まいにち学校で勉強に励んでいることと思います。恥ずかしながら、私は高校生の時にきちんと勉強しませんでした。「何で〇〇を学ばないといけないんだ」と屁理屈をこねていたことを思い出します。最近になって、もっと勉強しておけばよかったなあと後悔しています。それはさておき、学校で学ぶ知識はなぜ「必要」なのでしょう？ 受験のため？ 就職のため？ 生きていくため？ 言い方をかえてみましょう。学校で教えらる知識は、誰が「必要」だと決めたのでしょうか？ 政治家ですか？ お役人？ 学者？ 誰なのでしょう？

学校の知識は「必要」だということを、少し難しい言葉に置き換えると「知識の正当性」となります。そして、「知識の正当性」に関しては、多くの学者が研究しています。

ひとつ例をあげてみましょう。マイケル・アップル (Apple, M. W.) というアメリカの学者は、学校で教えらる知識は公正で中立ではなく、社会的・政治的・文化的な対立の産物だと述べています。みなさんが普段使っている教科書もそうです。アップルは「教科書というのは単に「事実」を「配達するシステム」ではないからだ。教科書は同時に、政治的・経済的・文化的な活動、戦い、そして妥協の産物なのである。それは、現実の利害を担った現実の人々によって、考えられ、構成され、そして著されたものである」(『オフィシャル・ノレッジ批判』)と言っています。ちょっと難しいですね。でも、何となく意味はわかりませんか？ 学校で伝達される(教科書に載っている)知識は、いろいろな「利害」が絡まりあっているんですね。誰にとっても「正当」ものではなく、「これからの時代には大切だ」、「子どもの発達を考えると欠かせない」などの声があがって、「正当」な知識になるのかしれません。もちろん、学校の知識が無意味だと言っているわけではありません。知識を身につけることは重要です。

私は「教育社会学」という分野で研究をしています。いままで書いたように、学校で教えらる知識(「教育知識」と呼んでおきましょう)に関心を持っており、最近では教育知識が「いつ」「どこで」「誰によって」「誰のため」に正当と決められるのかについて、あれこれと考えています。

ここまで読んで、なぜ教育知識の正当性を研究するの?と思った方もいるでしょう。私はこの研究は重要だと考えています。いま、多くの若者が就職、進学、結婚など人生のさまざまな場面で苦境に立たされています。そうした苦しみを少しでも緩和するうえで、知識は必要不可欠です。そして教育知識の研究が進めば、みなさんのような若い人が必要とする知識は何なのか、そしてどのようにして作ってあげればよいかということがわかるようになるはずですよ。